

多職種連携協働の今日的意義と グループワークの進め方

東京ふれあい医療生活協同組合
梶原診療所 在宅サポートセンター

平原佐斗司

チームとは？

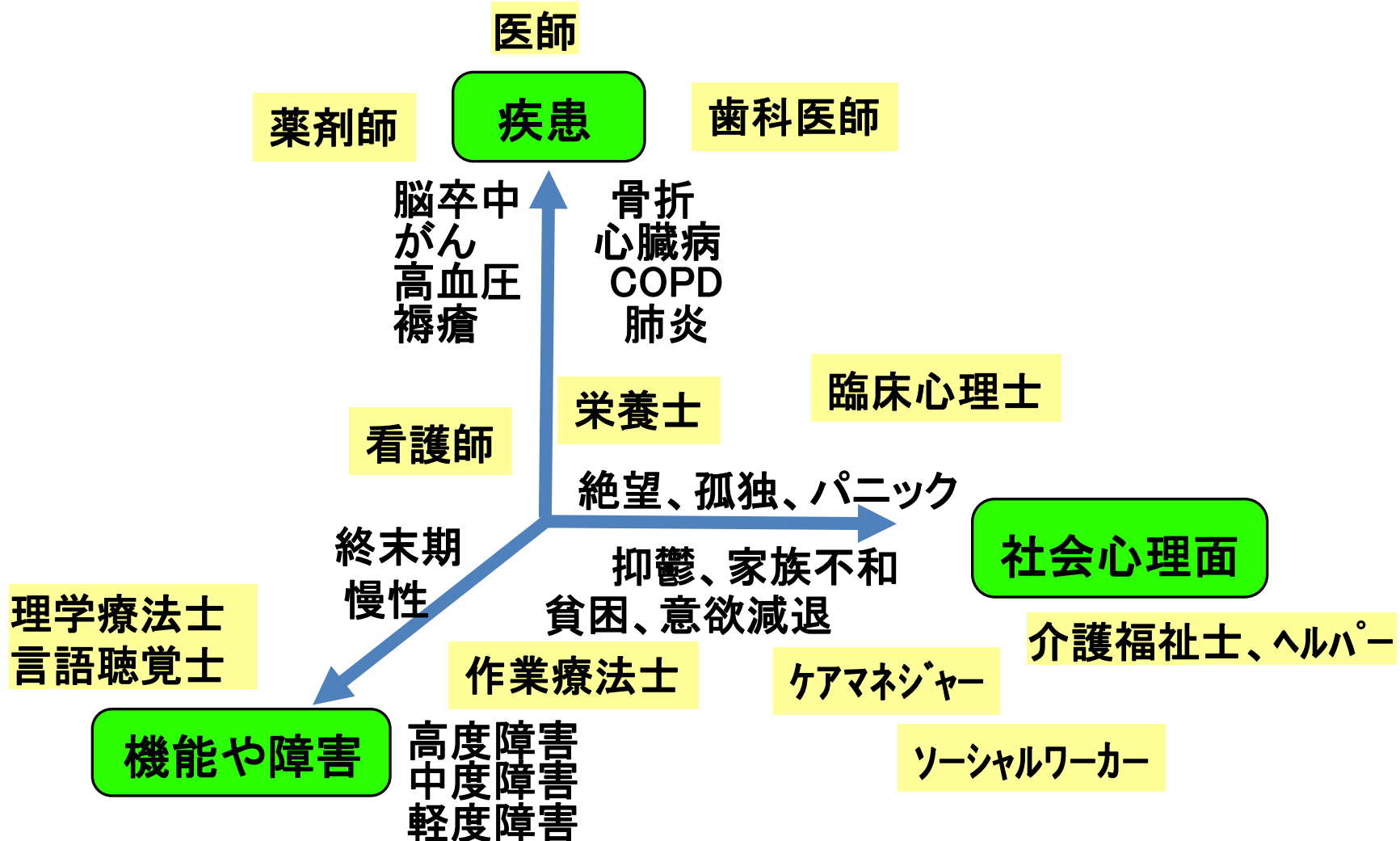
- ✦ 「ヘルスチームとは、健康に関するコミュニティのニーズによって決定された**共通のゴール・目的**をもち、**ゴール達成**に向かってメンバー各自が**自己の能力と技能**を発揮し、かつ**他者のもつ機能と調整しながら**寄与していくグループである
(Inter-professional work におけるHealth Teamの定義;:WHO1984)
- ✦ チームとは、**一致した共通の目標や規範**をもち、**協働で仕事を**する**一団の人の事**を指す。チームには、**明確な目標、リーダー、そして円滑なコミュニケーション**(五感と言葉を通して、「思考」と「感情」を共有するプロセス)が必要である。
(ルースキャンベル)

Interdisciplinary careに関する 米国老年医学会の立場宣言

2005.1

- 1 IDCは、複雑な併有疾患を有する高齢患者の多様なニーズに対応する。
- 2 IDCは、老年症候群に対する医療の過程と結果を改善する。
- 3 IDCは、医療システムの改善と介護者の負担軽減に寄与する。
- 4 IDCの研修と教育は、高齢者の医療ケアに当たる者に有効である。

在宅ケアの多面性と IPWの有効性



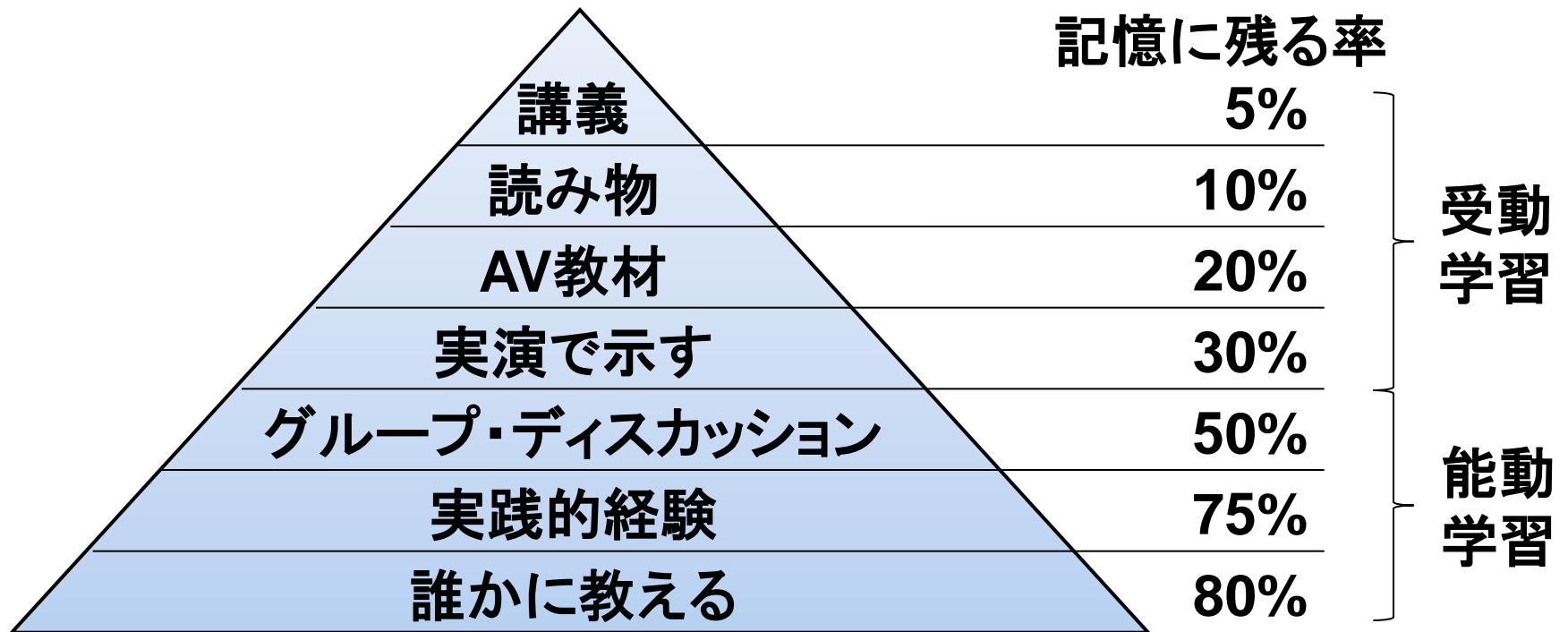
最大のアウトカムを得るためにはIPWが必要

在宅ケアで多職種連携が 推奨される理由

- 1 チームで対応することによって、在宅患者の身体的、心理的、社会的な問題、及び家族も含めた複雑なニーズにより良く対応でき、それによって彼らの健康とQOLの向上に寄与する。
- 2 多職種間で、知識と技能を分かち合うことによって、各専門職に求められているものが明確となり、その結果各職種の専門性を強化することになる。
- 3 患者や家族に必要なケアや地域に必要なシステムなどについてより俯瞰的にみる視点が養われる。
- 4 在宅ケアに関わる仕事をより豊かで、興味深いものにする。

ワークショップとグループワーク の進め方

学んだ内容は どの程度記憶に残るか



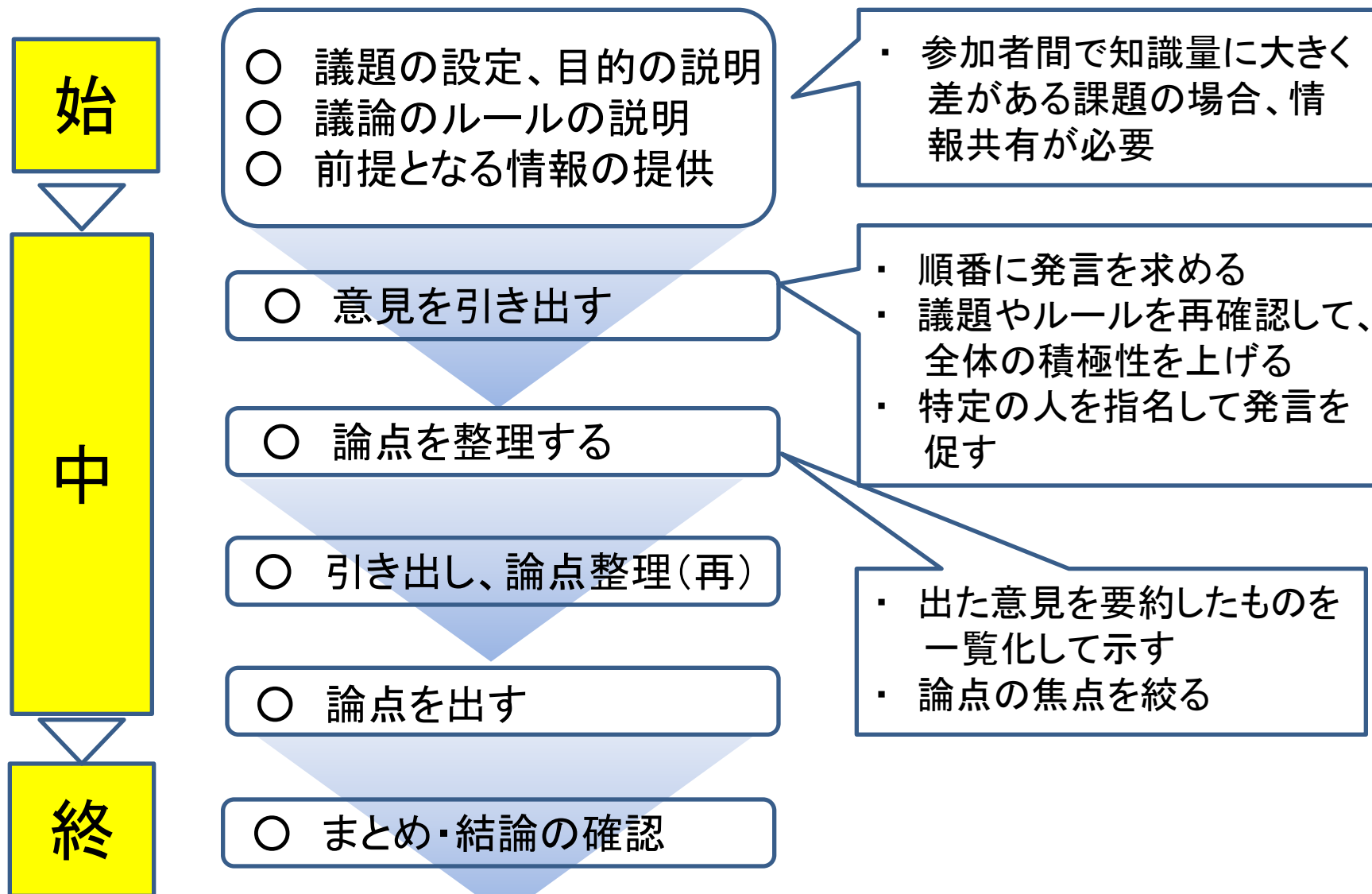
ワークショップとは？

- ワークショップ = 参加・体験型の学習・対話の手法
 - 参加者が討論・創作して(work)、発表・提案する(shop)
 - ワークショップの標準的な流れ
 - グループワーク ⇒ 全体で発表 ⇒ 相互評価
- ワークショップの工夫
 - 話やすい小グループに分かれて討論する
 - 付箋にアイデアを書き出し、整理する(KJ法など)
 - 意見を板書して整理する
 - 現場・現地を調査して、議論する(インタビューなど)
 - 寸劇をつくる(ロールプレイなど)

グループワークの意義

1. 能動的に参加する中で学ぶため、学習者の意欲や集中力を高め、学習効率を高める
2. 現場にある実践的な課題を、仮想チームの中で解決しながら学ぶため、実践的な学習になる。
3. 自分の考えや知識を他の専門職と共有しながら学ぶことができるとともに、他の専門職から自分の専門性に求められていることを理解することで、専門職としての学習意欲ややりがいを高める。

グループワーク進行の流れ



意見を引き出すための具体的な方法

- 事前準備
 - 適正な人数・・6～8名の適切な人数のグループ分け
 - 皆が話せるテーマの設定
- 発言の方法
 - 同じ人が長く話さないように時間に気を配る。
 - 順番に発言したり、発言のない人に発言を促す。
- 工夫
 - いきなり発言を求めず、準備する時間をとる
 - 付箋に意見を書き出してもらう(KJ法など)

グループワークの中で緊張が生じる時

- 安全性が保障されていない
 - 自分の発言が他人に誤解された
 - 人の発言を聞いて、他の参加者に対する敵意を感じた
- 論点がずれる
 - 今話題になっていることが重要でないと思う
 - これは、皆で話すべきことではない
- 議論が成り立っていない
 - 専門用語が多すぎてわからなかった
 - 難しくてついていけない
- 進行速度
 - 進行が遅(速)すぎる。

グループワークを進める上で重要なこと

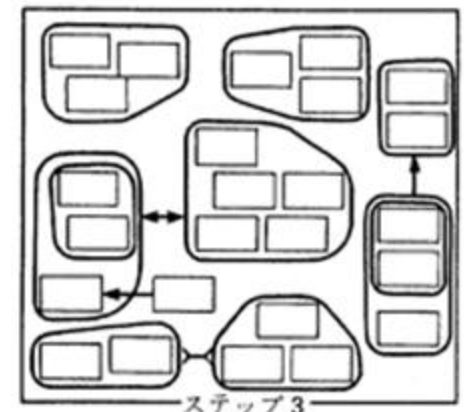
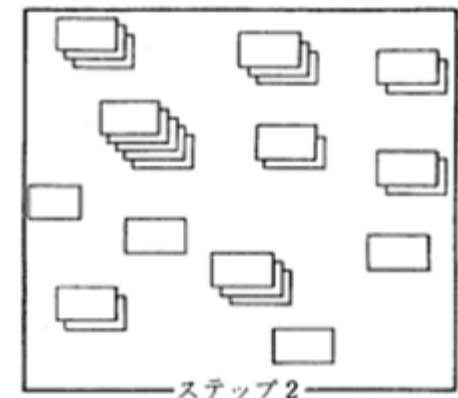
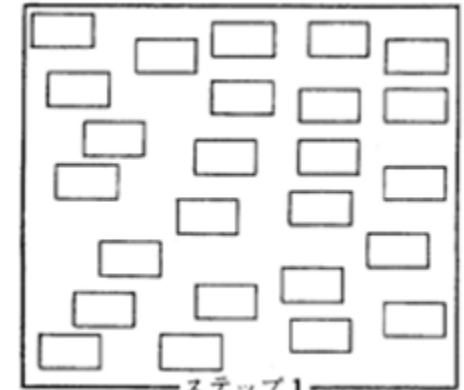
1. 「時間管理」: 時間を守って進行する
2. 「公平さ」: 公平に発言機会を提供する
3. 「編集力」: 議論を踏まえて、適切に論点を絞る

多職種間の議論で注意すること

- 共通の目標をもって議論する
 - 患者と介護者のニーズにフォーカスをあてる
 - 「本人の幸せ」という共通の目標で議論する
- お互いの専門性を尊重する
 - お互いの専門分野のことを否定しない
- 専門性の背景(知識・文化)と専門用語に配慮する
 - 専門用語や略語は使わない
 - 基本的知識面での違いに配慮する
 - 多職種の役割を知るため、自己紹介の時間をとる

KJ法の方法

- **第1段階**・・・考えなければならないテーマについて思いついた事をカードに書き出す。この時、1枚のカードには1つの事だけを書く(個人作業)
- **第2段階**・・・同じグループに入れたくなったカードごとにグループを形成する。グループが形成されたら、グループ全体を表わす一文を書いた表題を決めてラベルに書きこむ。
- **第3段階**・・・グループ化されたカードを1枚の大きな紙の上に配置して図解を作成する。近いと感じられたカード同志を近くに置く。そして、カードやグループの間の関係を示したい時には、それらの間に関係線を引く。



グループワークのまとめ

- 話されたことの確認を行う
 - 目的に対して、どういうことが話されたかを簡潔にまとめる
 - グループとして発表する内容を確認する
- 何らかの結論を出す必要がある場合
 - 結論について案を提示し、その理由の明示する
 - 結論を確認する 口頭で「この案でよろしいですか？」
 - 意見が分かれる場合は、各案の支持状況を確認し、どちらを支持するか決める

まとめ

- 在宅医療では、身体—心理—社会的な問題が混然一体となって横たわっており、患者と家族にとっての最善を実現するためには、多職種によるチームアプローチが不可欠である。
- 地域での多職種研修では、ワークショップなどの参加型の、能動的な学習スタイルを取り入れる必要がある。
- ワークショップの標準的な流れは、「グループワーク」⇒「全体発表」⇒「相互評価」である。
- ファシリテーターは、グループワークの「議題の設定」⇒「意見の引き出し、論点整理の繰り返し」⇒「まとめ」という流れを意識して進行する。
- ファシリテーターは、全体のタイムキープを行いながら、すべてのグループメンバーの公平な参加を保障し、中立な姿勢で議論を編集する。また、議題の呈示、論点整理、緊張の緩和など話し合いの進行のための様々な配慮を行う。